非核・いしかわ

2020年6月20日　月刊第263号

〒920-0848 金沢市京町28-8　石川民医連労働組合気付
非核の政府を求める石川の会
TEL 076-251-0014　FAX 076-251-3930
http://hikakuishikawa.com/

非核五項目
① 全人類共通の課題として核戦争防止、核兵器廃絶の実現を求める
② 国是とされる非核三原則（つくらず、もたず、もちこませず）を厳守する
③ 日本の核戦場化へのすべての措置を阻止する
④ 国家補償による被爆者援護法を制定する
⑤ 原水爆禁止世界大会のこれまでの合意にもとづいて国際連帯を強化する

核兵器禁止条約の署名は81か国、批准は38か国（6月15日現在）

1面　意気高く　富山県行進団から引き継ぐ　中村昭一
2面　コロナ問題を人権の視点で　井上英夫
3面　今「緊急必要」なこと　日本国憲法を活かす政府をつくろう　五十嵐正博
3面　ステイホーム　原　和人
4面　弔辞・河崎俊栄住職　鳥越順丸
5面　初めてのオンライン会議　神田順一
夏の思い出　末友雅子
6面　鉄板道路？を見つけて　杉山正彦
6面　私とサルビアとベコニア　寺越博之
＜独標＞ナンバー０３・１１　大川陽一
非核、同じ思いで　山口修治
8面　いしかわの戦争遺跡めぐり　中西　優
絵手紙コーナー　広瀬勝子

【二〇二〇年原水爆禁止国民平和大行進の報告】

意気高く　富山県から引き継ぐ

編集長　中村昭一

新型ウイルス禍のため諸行事が困難となるなか、今年の国民平和大行進は一四日、例年通り津幡町九折（つづらおり）にて、富山県行進団から石川県行進団に引き継がれました。

（写真：引継式後、行進幕を囲んで）

引継式は、石川県平和委員会事務局長の柴原和美さんの司会で進行し、新婦人富山県本部会長の広瀬妙子さんが富山県を代表して挨拶し、県内の取り組みと石川県の皆さんへの激励を述べ、石川県を代表して県原水協代表理事の内藤晴一郎さんが挨拶と決意表明を行いました。その後、行進横断幕を囲んで集合写真を撮って解散となりました。今年は、車両による宣伝行動はあるものの、参加者による行進や反核平和マラソンは中止となります。しかし全自治体への要請行動は、例年通り行われます。

過去に例のない極めて異例な形の引継式でしたが、参加者は意気軒昂で、生憎の強い雨にも拘わらず例年通り多数の皆さんが出席し、元気に引継式を終えました。たとえ困難が生じたとしても、この平和行進を成功させ、もう少しで核兵器が国際法上、違法となる時代を、皆で歓びをもって迎えようとの熱意がみなぎっていました。

花鳥風月

我が家に古い本がある。書名は『復活の日』で、小松左京作。人類がウイルスによってほぼ滅亡するという物語だ▼奥付を見ると昭和五五年二八刷。当時はかなり売れたのであろうが、かなり昔のこと。しかし先日、増刷されたものが本屋で平積みされているのを見た。このコロナ禍で、需要が掘り起こされたようだ▼ＳＦの世界では、ウイルスのパンデミックは珍しい話ではない。異星人の襲来やコンピューターの叛乱などで、人類が滅亡の危機に瀕するのもよくある話だ▼それらの物語の多くでは、危機が去って社会が再建されていくが、今回は、いつ危機が去るのかが分からない。そもそも、元の社会には戻れないとして、「ウイズ・コロナ」という表現もされている。危機が去らずに（言い方は悪いが）だらだらと続く世界を描いた作家は、たぶん誰もいないであろう。事実は時として、空想を超越して奇妙な様相となるものだ▼自らの死や人類の滅亡の不安におののくほどではないが、いつまで続くのか分からない、真綿で首を締められるような日常。こうした日々を生きていく可能性を予見していた人は、誰かいるのであろうか。（山）

コロナ問題を人権の視点で

代表世話人　井上英夫

コロナ禍の中で

コロナ禍、皆さんご無事でお過ごしでしょうか。

一週間前ようやく届いた「アベノマスク」を前に悩んでいます。安倍に突っ返そうか。こどもたちに使ってもらおうかと。近所の養護施設の施設長さんに相談したら、こどもでも役に立たないし、もう余っているからいらない、と言われました。世紀の愚策ですね。愚策は、ほかにも一杯ありますけど。

私も、時間ができたので。庭仕事に励み、花や樹木、鳥のさえずりに囲まれて暮らしています。自然の偉大さと有難さを痛感しています。金沢は、今春、花々が一斉に咲き誇り、桜も長く楽しませてくれました。

この間、日本高齢者人権宣言草案づくりに取り組みました。WEB会議とメールで意見を交わし、高齢期運動連絡会に提案しました。今後、議論を重ね、高齢期運動の要求と目標の指針とするものですが、何より日本政府に高齢者の人権保障への責任を果たさせ、国連高齢者人権条約策定へのリーダーシップを取るように迫るものです。

コロナ禍は、とくに高齢者を襲い、石川県かほく市の二ツ屋病院が典型ですが、人権の砦たるべき病院や特別養護老人ホームでの感染、死亡も目立ちます。そんな中で、働くことのできない、価値のない人間は死んでも良いというような優生的、劣等処遇的考え方も広まり、「姥捨て山」を作れという主張さえあらわれています。

この国の未来がかかっている

コロナ禍や地震、津波、原発事故等の災害、緊急時こそ、国や社会の諸問題が集中的に表れます。コロナ禍で医療や介護崩壊がいわれ、教育そして雇用等の危機が叫ばれていますが、問われているのは国の政策です。平常時の豊かで、分厚い人権保障こそ、緊急時、非常時にも力を発揮し、人々の営業、労働、生命、生存、生活、健康、文化、教育等の諸権利を守ることができるわけです。

コロナ問題にはこの国の未来がかかっています。まさに人権保障そして国民主権・民主主義、平和主義を掲げる憲法を守り、より発展させるのか、緊急事態を口実に、改憲・「独裁」への道を開くのか。とくにコロナ問題を人権の視点でとらえる必要があると思います。

ところが、「生活の在り方」を考えようなどという国民への責任転嫁が目立ちます。変わらなければならないのは、何より安倍政権です。

言葉に注意

コロナ禍のなかで、カタカナ用語はじめ気になる言葉が乱用されています。そのいくつかを。

「自粛」と「支援」

国民への「自粛」とは、「禁止」ではなく国民の自主性を尊重しているようですが、実は、社会保障の自立・自助、共助、公助論と根っこは同じ、国は結果には責任は持ちませんよ、ということですね。営業等財産権の制限に対する「正当な補償」は国の義務ですが、一貫して拒否し、「支援」を連発しています。マスコミも人々も「支援」にならされていますが、補償そして社会保障も「公助・支援」ではなく人権として「保障」されています。「補償」そして「保障」とは、主権者国民の権利であり、国に義務と責任があるということを意味しています。

「不要不急」

外出自粛の「基準」とされているのが、「不要不急」ですね。原発、リニアモーターカー、カジノそして軍事費こそ不要不急な最大のものでしょう。

私たち社会権の会（防衛費より教育を受ける権利と生存権の保障に公的支出を求める専門家の会）の四月一五日の声明をご覧ください。

（https://blog.goo.ne.jp/shakaiken/e/6865991853d5854037dd0ea221a9e918）

ミサイル・戦闘機よりバターを、軍事費より人権保障に。非核の政府を求める会として、この訴えを広めましょう。

「アラート」「ステイホーム」

アメリカかぶれ？の小池都知事がカタカナ英語を頻発していますが、アラートは「警報」でよいでしょう。また、ステイホームと耳障りは良いのですが、命令形ですね。家にいろと自粛を「強制」されている感じがします。

ハンセン病政策を教訓に

日本は、感染症に対して、ハンセン病「強制絶対終生隔離収容絶滅政策」という負の歴史をもっています。ハンセン病は薬で完治し、死に至る病ではありませんが、どんなに強力かつ危険な病気であっても人権保障が貫かれなければならないということが、大事な点です。この教訓が生かされなけれ

ばならないと思います。

この点、私の「新型コロナウイルス感染症と高齢者の人権」(『ゆたかなくらし』二〇二〇年六月、七月号)をご覧ください。(日本高齢期運動サポートセンター理事長)

今「必要緊急」なこと

日本国憲法を活かす政府をつくろう

代表世話人　五十嵐正博

私たちは、今、新型コロナ・パンデミックの渦中にいます。パン(すべての)デミア(人々)、まさに地球上のすべての人を襲う感染症。人間は、地球上に存在する何百万、いや何千万とも知れぬ種の一つにすぎません。すべての種が、地球誕生以来、種の生存・共存のためのメカニズムを営々と作り上げてきたのでしょう。しかし、人間だけが、森羅万象を支配できると思い込む「おごり・思い上がり」を持っているのではないか。現下の事態は、「経済成長」を金科玉条とし、人間一人ひとりの尊厳をないがしろにしてきたことに対する「戒め」「警鐘」とも思います。

人間は、何を、どこまで反省し、その反省を将来に生かすことができる歴史を、私たちは見て見ぬふりをしてきたのではないかとさえ思いたくなります。

今回のコロナ禍との直接の関連はさておき、気候変動がもたらす様々のリスクが語られてきました。一九八八年設立の「気候変動に関する政府間パネル(IPCC)」は、「世界平均気温の上昇による主な影響」として「感染症による社会的負荷の増加」「医療サービスへの重大な負荷」を指摘し(二〇〇七年報告書)、さらに「二一世紀半ばまでに予想される気候変動は、主に既存の健康上の問題を悪化させることで、人間の健康に影響を与える」「確信度が非常に高い」としました(二〇一四年報告書)。温暖化対策は一向に進んでいません。

IPCCの警告は無視され続けただけでなく、むしろ、この国で進められてきた無残な福祉・医療の切り捨てが現在の混乱、悲惨な事態を招いています。予想された事態なのです。井上英夫さんが、国立病院の再編・統合に反対する運動をしていた姿を思い出します。

今、目の前のコロナ禍の収束を図らなければなりません。国民には「不要不急の外出自粛」「三密回避」を要請しつつ、右往左往する安倍政権。今日を生き抜くことに汲々としている多くの人に救済の手が届かない。この国の歴代政権は、日本国憲法を活かす努力を怠ってきたからです。

安倍政権の立ち位置は、「個人よりもお国(そしてお友だち)のために」。コロナ対策に当たって「必要緊急」なことは、日本国憲法を活かす政策です。軍事費の支出を止めて、一人ひとりの尊厳を守る政策の即時の実施です。

＊　＊　＊

私の父親は、敗戦後、一時公職追放になりましたが、一九五〇年、全国各地に家畜保健衛生所が設置され、群馬県太田市の初代所長になりました。父二十八歳。私が生まれた翌年でした。父が「抗原抗体反応」と話していた記憶がよみがえりました。半世紀以上前、すでに行われていた「抗体検査」、その実施が未だに滞っていることに驚くばかりです。

「あれよあれよ」という間の(政策決定過程が不透明な)「上意下達」の乱発、それらを垂れ流しするマスコミ、そしてそれに唯々諾々と従う(従わされる)市民。ファシズム体制との類似を指摘する見解も見られます。そうさせないためには、憲法を活かす「信頼できる政府」を私たち市民がつくること、それしかありません。

(神戸大学名誉教授、金沢大学名誉教授)

ステイホーム

原　和人

新型コロナウイルスの感染拡大に伴って「ステイホーム」という呼びかけが至る所で行われた。新型コロナウイルスは感染症なので接触の機会を少なくすればするほど感染の広がりが少なくなる。みんなが家に閉じこもれば、その家に誰かがウイルスを持ち込まない限り安全だ。

僕が二〇年も前から診察している八八歳の高齢の女性がいる。彼女は頸椎後縦靭帯骨化症という難病で頸椎が悪いために両手のしびれや筋力低下が進行している。五月の後半の予約日に彼女がやってきた。順番がきたので僕がお呼びすると椅子から立ち上がられたが、スムーズに立つことができず、その後よろよろとなった。診察

室に入られた後で、僕が「随分、体力が落ちたみたいだね」というと、「そうなんです。いつも行っている高齢者センターは休館になるし、時々、近くの人たちと行く散歩もできないし」という返事だ。まあ高齢者センターには、お弁当やお菓子をもっていくので、「あ、また糖尿病が悪くなったね」というと、センターでお菓子を食べすぎたと白状する。

ステイホームによって、高齢者の体力低下が著しい。高齢者で元気な人たちは、何かの運動をしている人たちが多い。僕もジムに通っているが、デイタイム会員に高齢者が多い。新型コロナウイルスの感染が始まった初期の頃、ロッカールームで「ここがダメになったら行くところがなくなってしまう」という会話が聞かれた。

著者　原　和人　発行所　いかだ社
体裁　A5判　一七四頁
定価　一三〇〇円（税別）

都会では公園でウォーキングしても密になってしまう。金沢でも、グランドゴルフやパークゴルフの会場も閉鎖された。僕のジムが休館になっている間、家の近くを散歩した。そういうこともあって、患者さんには「金沢で散歩しても密ということはないのだから近くを散歩してくださいね」と勧めた。でも、と患者さんがいう。「ステイホームと言われているのでなかなか外には出にくいのですよ」と。近所の目があるらしい。ステイホームが呼びかけられて「自粛警察」という人達が現れた。なんだか「羹（あつもの）に懲りて膾（なます）を吹く」ということが横行してしまったような気がする。

一律に禁止するのではなく、どうすればソーシャルディスタンスを保って感染防止ができるのかを周知徹底させるべきだ。ダメ、ダメを連発するのではなく、自主性に任せながら各人が気をつける、そのようにしないと、ステイホームが解除された後には、要介護の人たちが増加し、高齢者の平均寿命が短くなってしまうのではないかと心配する。

（非核の政府を求める会常任世話人）

弔辞

平和の祈りを行動の波へ

核廃絶の運動に尽力された石川宗平協理事長河崎俊栄さん

五月二〇日に訃報の知らせが入り、冷静に受け止めたつもりでしたが「石川宗平協＝石川県宗教者平和協議会をこれからどうしたらいいのか」と、とっさに考えてしまいました。

思いかえせば一一年前、二〇〇九年九月一六日に石川宗平協が結成されました。

結成前に、私のお寺に来られ「私、河崎と藤井さん、そしてあなたと三人だけでもいいじゃないか」と言われ、石川県内で宗教人の政治、社会に対する姿勢を明らかにする団体の結成に取り組みました。日本宗平協や石川県内の民主団体の方々のご指導・ご協力のもと、一七名の会員を迎えて結成されました。この時の記念写真を見ても、河崎理事長さんの清々しいお顔は、それ以来も、ずうーっと続き、七尾から金沢までを往復し、あらゆる平和運動や社会市民活動に参加されていました。そして**「世界は平和じゃなくちゃ」**といつもつぶやいておられました。

ニューヨークでの五年毎の核兵器不拡散条約再検討会議への参加や三月一日の静岡県焼津市でのビキニ・デーの参加、広島・長崎原爆投下の抗議断食の行の参加を通じて、強く核の脅威を訴え、廃絶への道を研究、実践をしてこられました。また最近もヒバクシャ国際署名への行動に力を入れておられました。

私に「頼むぞ・・・」と頼まれていましたが、未だ具体的な取り組みをしていないことを、ここに報告することはつらいことです。

日本宗平協の標語**「平和の祈りを行動の波へ」**をそのまま実践され、この心意気を私たち石川宗平協はしっかり受け継ぎ、実践していく取り組みを早急に協議します。

パソコンを打てない私の読みづらい文章をいつも我慢して読んでいただきました。今日も手書きの弔辞となりました。寛大によろしくお願いします。ありがとうございました。　合掌。

二〇二〇年五月二五日

石川県宗教者平和協議会

事務局長　鳥越順丸

非核・平和のひろば

コロナ禍のもと、はじめてのオンライン会議

神田順一

コロナ禍のため外出自粛を強いられていた五月連休中に三日連続でオンライン会議に参加する機会がありました。私が学生時代に一九六九年から七〇年代前半まで暮らした金沢市弥生の北溟寮が、築五〇年の二〇一七年三月廃寮になった跡地に記念碑を建設し、その維持管理をおこなう北溟寮OB会の設立総会が五月五日、オンライン（ZOOm）で開催されたからです。ZOOmは未体験だったが、「ステイ・ホーム」期間中に何か新しいことを始めたいと勇気を出して設立総会に参加申込みしました。

私のパソコンにはカメラ機能がなかったため、家電量販店で外付けカメラを探したが、この時期は大変な人気商品で入荷見通しは立たないとの返答。慌ててアマゾンで注文したが、納品は三週間後となりビデオ映像なしの参加になりました。

さて、初日はオンライン会議への接続の練習です。主催者（OB会設立準備会）からの招待URLをクリックしただけで案外簡単に接続できました。二日目は総会のリハーサル、三日目は本番です。初めて接続できたとき、私も発言を求められましたが、パソコンのどこにマイク機能があるかわからず、必死にZOOmの画面を探してどうにか発声することができました。

オンライン会議の面白いところは、参加者の表情がリアルに映し出されることや〝画面共有〟により会議資料を表示すること、各自がビデオ映像やマイク機能を自在に操作できること、手上げ機能や発言者への反応（「賛成」「拍手」）もできることです。設立総会には八〇年代前半に寮生だった現役世代を中心に四二人の参加があり、この〝画面共有〟や「賛成」「拍手」を利用して実にスムーズに進行されました。北溟寮寮歌の一節「我が名輝け」を刻む記念碑は今年度中に建設予定です。総会終了後には今はやりの「オンライン飲み会」を始める強者もおり、大盛況でした。

私が参加している「戦争をさせない石川の会」や「いしかわ市民連合」でもコロナ禍のもと、オンライン会議の導入が検討されており、貴重な初体験になりました。

非核石川の会リレーエッセー

夏の思い出

末友雅子

今年の平和行進が中止となった。私にとっての夏が一つ無くなった。約五〇年前看護学生だった頃、原水爆禁止平和大行進に出会った。平和委員会の会員として仲間と共に参加した。今となっては断片的だが、野々市町役場の前でお茶の接待を受けて歓待されたこと、寺井？へ向かって軽トラの荷台に乗って移動したことなどが心に残っている。

原水爆禁止世界大会に一人別行動で広島へ行ったときは、広島球場のあふれんばかりの人と、流れていた「自由ベトナム行進曲」が強烈な印象で、その歌はその時聴いただけで覚えてしまった。長崎の大会では「金看三人娘」（三人で平和委員会の基礎組織）で開会より先に長崎の戦跡をたずねようと、これまた代表団と別行動で長崎入り。何も考えずに若い娘達は宿も取ってなくて、永井隆記念館の管理人さんのアパートに転がり込んで泊めていただいた。大会の中で何が話されていたかということは、実は全く覚えていないのだが、その高揚感は今も心の奥に残っている。

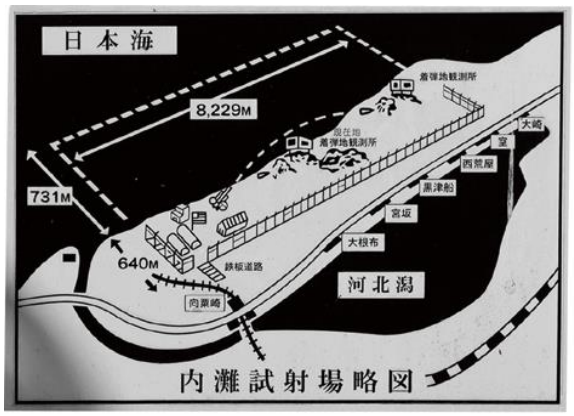
二〇一三年退職の年、県内通し行進者として歩いた。この年は、最後の加賀市役所から吉崎への引き継ぎまでの日が晴れたけど、ほとんどは曇り雨の中の行進だった。手を振って応えてくれたトラックの運転手さん、ずぶ濡れの一行を応接室で迎えて下さった川北町、歩くという誰でも出来る事に「私たちの代わりに歩いてくれてありがとう」と言って下さる方、そして、人間は歩けるのだという実感。「歩くだけで何が変わるんだ？」という人もあるかもしれないが、出会いと一〇〇キロ近くを歩く中で核兵器廃絶へ自分の意志が確かになる。ただの思い出ではない。核の消える日まで、いくつになっても一歩でも二歩でも歩こう。

2013年平和行進で県内通し行進した筆者（左から2人目）

鉄板道路？を見つけて

杉山正彦

町内のゴミ収集場所にそれらしきドブ板を最近発見した。そこはかって活動家が住んでいたこともそれを思わせる。（そんな物はどこにでもあるドブ板、なのかもしれないが・・・）。いずれ内灘町の歴史民俗資料館へ行って確かめたり、先輩に聞いてみるつもり。



1953年3月～1957年3月、米軍試射場に

ドブ板の正誤はひとまず置き、私がここで言いたいのは、その板を見つけた時、私の脳裏に私の学生時代に内灘闘争があり、全国から学生や労働者が集まってきたり、公民館に寝泊まりして時々学校に行ったり、北陸鉄道労組が強く浅野川線の電車賃が無料だったり、試射の着弾地に作った藁作りの団結小屋にオカカたちと居たり、辻政信が来たり、茹昭三先生が白衣を着て看護婦と小旗を掲げて診察にきたり、中央合唱団に合唱指導を受けたり、朝鮮の人のアリランに感動したり、試射場まで白い砂丘に鉄板道路がひかれていたり・・・忘れかかっていたことが鮮明に思い出されたということ。

＊　＊　＊

歴史におけるシンボルの大切さ、人は忘れやすい。記憶と同時に、知識として知っている以上に感覚に訴えてわからせる力がある。

広島の原爆ドーム。「見るたびに被爆の悲惨さを思い出してしまう、壊して欲しい。」「保存には経費が掛かる、その財源を市の復興に使うべき。」・・・保存の賛否のなか、一歳で被爆し、一五歳で白血病死した楮山（カジヤマ）ヒロ子さんが日記に書いた『ドームを残して欲しい』の願いを中心にはじまった市民運動の成果。残してくれてよかったですね。もしあの原爆ドームがなかったら、今のノーモアヒロシマ、原水爆禁止、核廃絶の運動は無かったかもしれない。

（二〇二〇・六・九　記）

私とサルビアとベゴニア

寺越博之

花に感動できる人は認知症にならない

我が家の玄関前の二〇のプランターにサルビアとベゴニアが咲いている。私は二〇〇三年、介護保険のグループホーム開設に携わり、認知症のケアの学習を旺盛に行っていた。その一つに、金子満雄医師（浜松医大）の講演を聞いた。金子先生は、「花に感動できる人は認知症にならない」と述べられた。それ以来、私は毎年五月のゴールデンウィークにサルビアとベゴニアを植えてきた。サルビアとベゴニアは両方とも丈夫な花で、一一月中旬まで花を咲かせ、私たちや通行人たちに潤いを与えてきた。サルビア・ベゴニア効果かもしれないが、認知症の神様が我が家には今のところ、やってきていない。

モンシロチョウ・蜜蜂・てんとう虫が来ない

私は田舎の出身である。お袋が家の前の畑にいつも花をいっぱい植えていた。サルビア・ベゴニアの花を見ながら、いつも実家の前の風景と何かが違う、何かが足りないと思ってきた。その訳を新型コロナウイルスのことを勉強して気がついた。違いは我が家の花には、モンシロチョウ・蜜蜂・てんとう虫が来ないことである。実家の花には、モンシロチョウ・蜜蜂・てんとう虫、そしてツバメや雀などが賑わしかった。花は人間を和ませるために、美しい花を咲かせているのではない。蜜蜂などの昆虫によって花粉を運んでもらうため、子孫繁栄のためである。

玄関前の花を育む筆者

虫たちが来ない中で都市の花はどういう理由で花を咲かせているのだろうか。いやいや、モンシロチョウ・蜜蜂・てんとう虫がいない都市の環境は、はたして花だけでなく人間が住み続けるには適切なのだろうか。

詩人会議かなざわ「独標」より

ナンバー03・11

大川陽一

九年前のあの日
東北の大地が大きく揺れた時
わが家の愛犬も
消えかかる　いのちの火を
必至に点していた

津波と原発事故で
断ち切られた　いのちと生業
故郷を追われ
差別にさらされた人々

その哀しみを連れてきたのは
誰なのか
荒れ野に置き去られた心の洞を
埋めるのは　誰の仕事なのか

車のナンバープレートを
03・11と名付け
ささやかな抵抗を試みる
忘れない

悲しみの傷口を
見せずに生きる人々と
その傷口を
広げようとする者たちの
これまでと
これからを

非核、同じ思いで

詩人会議かなざわ代表　山口修治

わたしたちは、詩の創造と普及を軸にすえ平和と進歩、民主主義を指向する共通の立場にたって詩運動をすすめている詩人会議の目的に賛同し結成されたグループです。

会報「非核・いしかわ」に作品を掲載していただくようになって、今号で一〇〇回目となります。詩サークル関係者以外への継続的で貴重な作品発表の場ともなっており、当会としては本当にありがたい次第です。時々、作品を読まれた方から感想をいただくこともあり、感謝です。また、貴会の活動を機関紙を通して知ることができ、創作の刺激ともなっています。

多様な視点での作品、創作には独自の苦労もありますが、貴会のみなさまの少しでも潤いになれば幸いです。

今後とも、非核の政府の実現にむけて、詩作品で参加させていただければ幸いだと思っています。よろしくお願いいたします。

なお、当会への入会希望の方がおられましたら大歓迎です！！

【連絡先】
携帯　090-4684-5576
山口修治まで

◆新刊・予告◆

『記憶の灯（あか）り　希望の宙（そら）へ　いしかわの戦争と平和』

A4判一三二頁　オールカラー
定価　一三〇〇円（税込み）

二〇一八年一二月に石川県平和委員会と戦争をさせない石川の会が共同で「いしかわの戦争と平和」編集委員会を発足して、今秋刊行をめざしています。

●冊子タイトル『記憶の灯り　希望の宙へ　いしかわの戦争と平和』に込めた想い

無謀な戦争に突き進んだ日本の愚かさを伝え暗黒の時代を精一杯生きた人々の記憶に灯りを点し、その灯りが、今と未来を生きる人々の希望となるように。

●キーワード別に「十五年戦争」の実態と「戦後」のあゆみをたどる

日本戦争史における石川県の位置付けと戦跡を紹介することで理解が深まります。

戦争遺跡を語るには、七五年前のあの戦争はどういうものだったのか、を理解する必要があります。従来の戦跡マップでは、地域別に戦跡を紹介し、「この地域この場所でこんなことがあり、碑が建てられました」と、単発で説明するスタイルがほとんどでしたが、それでは日本の近現代史での戦跡の位置付けがわかりにくいものが多かったようです。本書では、キーワード別に、戦争の歴史そのものである日本近現代史をたどりながら、そのなかで石川の戦跡を紹介することで、本書を読まれた方がこんな悲惨な戦争は二度と起こしてはいけない、と素直に胸におち、一人でも多くの方が平和を願う行動に踏み出してくれることを願うものです。

＊詳しくは同封の案内チラシをご覧ください。

いしかわの戦争遺跡めぐり⑨

フォトグラファー　中西　優

白山ろく周辺の憩いの場として人気がある白山市鳥越地区のバードハミング鳥越。近年では夏になると周辺にひまわり畑が広がる有名スポットになりました。

この場所にも満州事変後、国策で中国東北部に送り込まれた「満蒙開拓団」の慰霊碑が残ります。開拓団は周辺地域の住民を中心に結成され、二二〇戸・六三〇人が入植。終戦前後の混乱の中で現地で開拓団の多くが犠牲となりました。

慰霊碑はもともと鳥越地区を見渡す鳥越城跡に建立されましたが、その後の整備で一九九九年に現在の場所に設置されています。近くを訪れた際には白山ろくの美しい自然を楽しむとともに、戦争の歴史にもぜひ思いをはせてみてください。

（写真左上）亜州白山郷開拓団新鳥越村慰霊塔（白山市鳥越のバードハミング鳥越前）

（写真左下）バードハミング鳥越周辺に広がるひまわり畑

絵手紙コーナー

金沢医療生協絵手紙班　広瀬勝子

■トピックス■

核兵器禁止条約の批准が三八か国に

核兵器禁止条約は、二〇一七年九月二〇日からニューヨークの国連本部で署名、批准の受付が始まっており、五〇か国が批准すると九〇日後に発効します。本年五月一九日に中米のベリーズ、六月六日にアフリカのレソトが批准書を国連事務総長に寄託し、批准国は三八か国となり、条約発効まで残り一二か国になりました。

編集室より

◎メディアが新型ウイルス一色に染まるなか〝重要報道が市民に伝わっているのか〟と問題意識を持つと、たしかに見逃せないものが多々ある。プーチン大統領はロシア改憲を目論んで領土発言をし、中国や北朝鮮は挑発行為を繰り返し、米国はもとより国内においても格差・貧困・差別が問われ、河井夫妻の公選法違反、陸上イージス計画停止や持続化給付金の委託費疑惑の中で、国会は追求逃れの閉会となった。マイナンバー離脱請求訴訟は原告の裁判所門前払い忖度判決となり、ウイルスについても、なぜ日本の感染状況は他国と大違いなのか、その分析調査とワクチンおよび治療薬の開発状況はどうなのか、市民は知りたいことが山積みだ。主権在民と権力監視機能を喪失することなく、市民とメディアは、本当に正しく生きて働いているのだろうか。

何れも人間の内心にある思考を言語文化で支え、その言論過程で形成された叡智で克服する他ない。

この会報編集も大打撃を受けているが、幸い会員諸氏の強い支えで発行を継続している。ただ感謝のみ。（中）